第1456回（3月20日）

構造改善の視点

北　園　正　伸

戦後の高度経済成長期を過ぎるころから，わが国においても，人々の社会経済に関する構造問題への関心が高まってきた。

構造概念じたいは，けっして目新しくも，難しくもないが，それを用いる論者によって，必ずしも統一した理解が得られないきらいがある。そこで，構造問題についての概念整理を試み，あわせて，現代における社会経済の構造展開の方向を探ることを目的とする。

構造問題への農政上の関心は，主として，散在する農耕地を企業集積して，農家の経営規模を拡大することにみられるが，経済分析を機能分析と構造分析に大別する学会伝統的な理解（酒井正三郎）では，構造分析の特徴を「非人格的秩序の分析」ないしは「具体性と個別性の追求」とみている。

個別・具体性の追求としての構造分析の重要化は，一つには，資本主義経済の発展を特徴づけてきた産業の社会的分化や経済の地域分化が，ここに来て，急速に進展したことに大きく影響されたものと考えられる。しかし，そこで捉えられる構造は，構造パラメーター概念に代表されるように，あくまでも，機能分析を補完する内容不明のブラック・ボックスを指すにすぎない。

具体・個別性の追求も重要だが，それには，例えば，生産におけるより広範な自由市場など，事物に共通する「場」の形成が必要である。具体・個別性は抽象・一般性を前提して，初めて有効な意味を持つにいたる。

具体・個別性と抽象・一般性，機能と構造とは相互に密接に対応しており，このことから，構造を『対象における法則性の存在様式」（森　毅）として捉えようとする，公理主義（一般には構造主義とも呼ばれる）に基づいた，比較的新しい理解もでてきた。

この理解では，機能や法則性を，むしろ対象事物によって表れる具体的な“はたらき”として考え，それら“はたらき”を原因している事物の内容的な“くみたて”を構造として捉えようとする。

対象事物に表れる機能や法則性には，人々は従わざるをえないものであるが，素材事物の“くみたて”は，人々が創造的活動に許される唯一の手段であり，したがって，この種の構造研究では，構造改善に向けての人々の実践活動と強く結びついている。

各種の構造は，事物を成り立たしめているいくつかの基本的関係（数学的公理）によって記述され，全構造は，事物の形や距離に特徴づけられる位相構造，序列に特徴づけられる順序構造，結合関係に特徴づけられる代数構造の3つのジャンルに整理した上で，各種構造を明示的に捉える研究が進んだ。

また，各ジャンル内で，構造は比較的簡単な公理系によって記述される単純構造から，付加的公理が加わった複雑構造への発展的秩序が考えられており，この考え方は，連続的発展に特徴づけられる社会経済構造の変化予想に際し，特に役立つものと考えられる。

各種の経済的構造問題のなかでも，とくに生産活動に限定すれば，代数構造との関連が深い。最も単純な代数構造は群であり，非可換的な乗法的操作と，その結果物としての積に特徴づけられる。操作が可換性を帯びるにつれて加法的となり，結果物は和に近づく。

乗法的操作（積）によって創造される機能は主として力や効率であり，加法的操作（和）では，しばしば新結合となって，新種機能の創造を結果する。

競争的社会にあって，力は生産活動における不可欠の要件となるものであるが，一方で，生産力の強大化による飽和の一般化と，他方で，社会的調和の要請から，全体としての社会構造は，積から和へ向けて，構造発展的に変化することが予想される。